

==== 編集後記 ====

本学の女性学インスティテュートの機関誌『女性学評論』も創刊後三年を迎える。その命名について、本誌が開かれた討議の場として機能するようにと、英語のタイトル *Women's Studies Forum* に当初の編集委員会の思い入れを託したと記憶する。『女性学評論』も多くの人々の協力を得て、創刊号、第2、3号と所収論文の数、新たに随想、書評欄など量、質ともに成長してきたと自負しているが、今後はさらに、開かれた機関誌として発展することを期待する。(K. B.)

女性学はたんに女性についての学問ではなく、性差別によるゆがみ・偏向のない人間の調和的実現めざすものですが、この編集にかかわり思ったことは、女子大学である本学も同じ理想を追うものでありたいということでした。(T. M.)

女性として妻・母親・主婦・嫁としての役割をつとめる中で、老若男女は相互補完的でありたいと念じながら、女性学インスティテュートに加えていただき、編集委員として今年も一年勉強させていただきました。本誌が創刊号よりは2号、そして3号へと成長し、今後更に充実していくことを期待いたします。(J. N.)

前号編集後記の T. M 氏のことばにもありましたが、女性学を通して、いまなお幾重もの差別と重圧の下にある多くのアジアの女性たちの問題、そして、その根にある、人類の負っているさまざまな社会的・文化的な偏見や思い込みからの自由と人間の品位の尊守を願わずにはおれません。(N. T.)

「女性」を、「女性学」として論じる。それは今迄、私には出来ないことだった。領域の定め方も、問題への接近法も、考える対象となることから逃げるふうでもあった。それが、このうとうしさは何故なのかと考え始めたくなった。(T. U.)

